

沼尻分場で構築した 和牛放牧のノウハウ

福島県農業総合センター畜産研究所沼尻分場
主任専門研究員兼分場長 遠藤孝悦

1 はじめに

平成17年3月に策定された「食料・農業・農村基本計画」では供給熱量総合食料自給率を平成15年度の40%を平成22年度には45%に高めるという目標数値が示されました。この目標を達成するためには、畜産の飼料自給率の向上が重要な課題として位置付けされています。

本県では、平成17年6月に開催された「福島県飼料増産運動推進協議会」において稲発酵粗飼料の作付拡大、国産稲わらの利用拡大とともに放牧の推進が具体的行動計画の柱に据えられています。

畜産研究所沼尻分場では、季節放牧を主体とした牧場経営を実践してきており、また平成11～15年度に(独)東北農業研究センターの指導により北海道、東北各県関係機関との連携の下、和牛肥育素牛の集約放牧育成技術確立試験を実施し、さらには、平成17年度から県が実施している「牛のいる風景創出事業」においては、遊休農地における放牧推進を技術面から支援してきたところです。

今回は、沼尻分場がこれまで積み上げてきました和牛放牧技術について、その一部を紹介します。

2 季節放牧を取り入れた沼尻分場の牧場経営

本場の飼養頭数は黒毛和種190頭余で、毎年、5月中旬から10月末まで約110頭を50.2haの放牧地と10.4haの兼用地(33牧区)において放牧する季節放牧を取り入れています。放牧地で無看護分娩が原則で、試験に供する子牛以外は、そこで4ヶ月間育成され、その後、畜産研究所の採卵牛や肥育牛へと振り分けられます。



▲開牧2006.5.16



▲電牧設置2006.8.8 (N-7兼用地)

3 遊休桑園を優良牧草地へ

遊休農地の問題は、農業生産力の減退のみならず農地利用集積や優良農地の確保の妨げになり、鳥獣害や病虫害の原因となったり、国土保全機能の低下により災害の引き金となりかねません。遊休桑園では、前処理として管理放牧した後、除草剤を散布し、マクロシードペレットを播きます。オーチャードグラスは植生が良く、トールフェスクは秋季の植生維持に有効でした。また、放牧資材として、簡易な電気牧柵支柱や桑立ち木の活用で建設費用が低減でき、単管パイプ活用の簡便な追い込み柵も考案しました。



▲遊休桑園の活用

(10 a 当たり・円)

項 目	金 額
電 気 牧 柵	12,706
放 牧 施 設	20,296
給 水 施 設	7,081
マクロシードペレット	36,285
除 草 処 理	2,474
燃 料	350
機 械 固 定 費	7,887
労 働 費	26,371
合 計	113,450

遊休桑園の放牧地造成費用▶

(標準的な放牧地造成コストの60～70%)

4 放牧場で生まれた仔牛は育ちが良い

放牧場で生まれた仔牛を親子放牧し、4ヶ月齢で離乳後舎飼育成し、300日齢で出荷した試験では、同じ父を持つ出荷牛と比較して日齢DGが10%高く、販売価格は市場平均を19%上回る結果となりました。

また、10ヶ月から肥育する試験では、16ヶ月以降、放牧場産子の方が高い発育を示し、終了時には20kg上回る結果となり、産肉成績でも、放牧産子で懸念されるBCS、きめ締まりの問題なく良好な結果となりました。

300日齢時の発育成績

(雄雌4頭平均)

	日齢DG (kg/日)	体重 (kg)	体高 (cm)	胸囲 (cm)
放牧場産子	0.96	289	116	155
舎飼産子	0.89	273	113	151

放牧場産子の枝肉成績

(出荷：29ヵ月齢)

	枝肉 重量	ロース芯 面積	バラ厚	皮下 脂肪厚	BMS No.
放牧場産子	433	58.0	7.6	1.9	5.0
舎飼産子	419	59.3	7.7	2.2	4.5

5 放牧実施農家への技術支援

県（農山村整備グループ所管）が実施してきた「牛のいる風景創出事業」では、平成17～18年度の2年間で、9地区8.2hの遊休農地を放牧地化しましたが、これら全ての地区で、沼尻分場では職員を派遣し、技術指導を行いました。イノシシやサル被害のあった地区が含まれていましたが、放牧地には野生動物は進入していませんでした。



▲沼尻分場職員の技術支援（牧柵支柱の設置、ソーラー電牧器の接続 電気牧柵による放牧）

6 おわりに

沼尻分場では、平成18年度から新たに、和牛の育成・肥育期の購入濃厚飼料を自給飼料で代替する試験や経年草地の更新方法に関する試験を実施しており、畜産経営における飼料自給率を高めるため、様々な検討をしていくこととしています。

畜産関係試験機関が農業総合センターに統合され、畜産研究所本所はもとより農業総合センター本所との稲ワラ・堆肥交換が新たに開始されたり、技術移転グループから試験研究に関する支援をいただくなど、これまで以上の連携・情報交換がなされてきており、試験研究機関としての機能が高まりつつあります。

沼尻分場としましても、より現場に近いところで、畜産経営の問題解決や新たな技術提案をしていきたいと考えております。